

の瓦解と共に流浪の末、足を止めたのがK町その時は二十一二歳の血氣盛りの頃であつた。

いかめしい結髪帯刀の寫眞が一枚、大切に秘藏されてゐる。

私は一度先生の住居を訪れた事がある。先生の住居は、K町から七八町離れた河邊にあつた。その時刀劍類を五六本出して説明された。それから色々な什器を出して来て見せて呉れた。その中に煙管や煙草盆などの珍らしいものがあつたので、私は不思議に思つた。飲酒丈は非常に好だといふ事は承知して居るが、煙管を吸つたことは、つひ一度も見たい事もなかつた。後で先生の道具好だといふ事を聞いて成程と思つた。

先事もありつた。ある日先生が私に向つて、

つたのと、性來の酒癖が善財の餘地なからしめたのだと思はれる。幾枚かの勲業債券を持つて居られた。常設番號が新聞などに發表されると、一行一行一字も落さず丹念にしらべては、落膽して居られた。三千圓當籤した先生の顔を見たかつたが遂にその幸運はめぐまれませんにしまつた。

妻子にも餘り幸運ではなかつた。長男はS師節を出た秀才であつたが、卒業後間もなく病死し、次男は横濱のある商館に店員として、主人からも將來を囑されて居たが、日露戦争の際御用商人として、あの常陸丸へ乗込んだので、空しく立海灘の藻屑と消えてしまつた。そんな事は知らず私が赴任の當初であつた。常陸丸の琵琶歌、口吟んでゐると、先生は、座り直して謹聴して居る。いつしか眼に

「安い煙管があるから買ひませんか。」と云はれたので私は、十銭か八銭位で煙管を買つて来て貰つた事がある。

先生は父兄からも信頼されて居るばかりでなく他の職員からも、愛敬されて居つた。健康とはいひ乍ら、老體なので授業やその他の事務も出来るだけ外の職員が手傳ふことを惜まなかつた。併し物堅い先生は容易に自分の仕事を人に任せるといふ事はしなかつた。

あの寒い冬の庭で、遊戯や體操をなされる先生の姿を見ると、誠にいたはしいやうな氣がするのでそればかりは到當外の職員が手傳つてやつた事がある。

こんな事を言つては先生に對して失禮かも知れぬが、先生の財政は餘り豊かではなかつたらしい。それは先生の性質として餘り蓄積がなかつたと思つて居たが、後に子息の話を聞いて同情の念に堪へなかつた。

それ以來私は「常陸丸」の琵琶歌をつゝしむ事にした。

一昨年の夏、當時の同僚T君が訪ねて来て先生の訃を傳へて呉れた。「あゝ、先生も逝くなられたか」と私は心から自分の無沙汰を詫びた。

六十有餘年の生涯を殆んど、人の爲め教へ子のために盡された先生は、誠に尊き足跡をこの世に残されたと謂はねばならぬ。

私は何時か先生の御墓を訪れて、せめては草花の一枝なりとも捧げて、先生の靈に御詫びをしたいと思ふて居る。